

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

■目標

●具体例によって理解する。

3 荻谷剛彦「隠れたカリキュラム」
かりやたけひこ

●参考『オックスフォードからの警鐘』【377/K21/1】 『学力の社会学』【375/K41】
『知的複眼思考法』【141/K9/1】 (北野高校図書館にある荻谷剛彦の本)

■追跡

① 小学校一年生の教科書から、今使っている教科書までを思い出してみてください。学年が上がると、教科書にのっている絵の数が減り、その分、字が増えていくでしょう。出てくる問題はむずかしくなっています。今なら小学校の算数の問題はなんなく解けるはずですよ。

② 学年が上がると、もっと複雑でむずかしいことを勉強するようになる。このような学年を単位とした学校生活を通じて、生徒たちはどんな隠れたカリキュラムを学んでいるのでしょうか。

タイトルにもなっているのだから、「隠れたカリキュラム」は何か大事なことを意味しているのだろうか。◆問いをつかむⅡ「生徒たちはどんな隠れたカリキュラムを学んでいるのか？」じゃ、「隠れたカリキュラム」って何？ 「カリキュラム」という語そのものは、およそ想像がつくだろう。小一では、何を学び、小二では…、といった、学校で学ぶ内容の計画のことだ。文科省が学習指導要領で決める。教育課程ともいう。指導要領は、別に隠されてはいない。では、「隠れた」って？

③ この問題を考えるために、隠れたカリキュラムを大きく二つに分けてみましょう。一つのタイプは、学校生活をスムーズに行うために入り込んでくる隠れたカリキュラムです。これは、授業などをきちんと行うために必要とされるいろいろなルールのことです。時間を守ることも、コミュニケーションのルールも、一人で勉強するのではなく、集団で勉強するときに必要な約束事です。

④ もうひとつのタイプは、もっと自然に、知らず知らずのうちに学校生活に入り込んでくる隠れたカリキュラムです。男女の区別や、年齢による区別といったことは、それが特別に問題とされないかぎり、「あたりまえ」のこととして学校の中でも使われる区別であり、約束事です。学校以外のところでも、なにげなく使われる区別が、そのまま学校でも使われるのです。

★具体例で理解。「時間を守る」「男女の区別」といったことが「隠れたカリキュラム」なのか——どちらも、教科書で習うようなことじゃない。「時間を守る」「自分の席に座る」といったことは、指導される約束事かもしれないけれど、男女や年齢の区別は、あたりまえすぎて約束事として意識しないほどだ。で、ここに何か問題が？

⑤ 日本人や日本という国についての意識も同じです。日本という国がすでにまともをもっていることや、私たちが日本人であるという意識があたりまえになっている現在では、日本という国のまともを前提に教育が行われるのも不思議ではありません。あたりまえと思われているからこそ、自然と学校

の中にも入ってくる考え方ののです。

⑥ 1.ここで重要なのは、第二のタイプ、つまり、知らず知らずのうちに学校に入り込んでくる隠れたカリキュラムです。というのも、この第二のタイプの隠れたカリキュラムによって、あたりまえだと思っていることが、あたりまえのまま疑われなくなることがあるからです。

何が問題か、少し見えてきた。日本の学校だから、学ぶのは日本人だ、という前提があるとしたら、確かに、問題がある。なぜなら、教室にいるのは、必ずしもいわゆる「日本人」だけじゃないからだ。当然のように「我が国」とか「私たち日本人は」という言い方をされると、教室にいる外国籍の子どもや外国にルーツを持つ子どもは、へんな感じを持つ。

「あたりまえだと思っていることが、あたりまえのまま疑われなくなることがあるから」は、きちんと「あたりまえだと思っていることが、じつはあたりまえではないのに、あたりまえのまま疑われなくなることがあるから」ということだ。★具体例から理解するとわかりやすいね。

⑦ 男女の区別にしても、年齢による区別にしても、慣れてしまえばあたりまえに思える区別です。では、男子と女子の区別にしても、ほかのやり方ではないのでしょうか。年齢ごとの集団づくりにしても、違う学年をごちゃ混ぜにするやり方はできないのでしょうか。そう疑ってみると、どうしてもそうしなければならぬほどの必然性があるとは限りません。出欠をとるときに男女ませこせで名前を呼んでも困らないはず。授業だって、塾や大学などでは、年齢にこだわらずにいっしょに勉強する集団がつけられることがあります。年齢よりどれだけの学力があるかを基準にクラスをつくってもよいのです。

⑧ 日本という国や日本人という意識にしても、外国人の子どもが日本の学校にもっと増えていけば、どうなるでしょう。今までのように、日本という国のまともを前提に、日本語や日本の歴史、地理を中心に教える教育が望ましいかどうか、疑問が出てくることだってあるでしょう。実際に、いろいろな国から人びとが集まってできたアメリカやカナダのような国では、それぞれの人種や民族の特徴を学校でもっと勉強させようという主張があるくらいなのです。

★具体例による理解の補強。

⑨ このように、隠れたカリキュラムを通じて、私たちは、自分たちのまわりの世界を、どのように区別するかを知らず知らずのうちに身につけていきます。男と女の違いをどう見るか。そして、そういう区別のしかたが、私たちの行動や考え方にも反映するようになります。たとえば、「男だから○○すべきだ」「女のくせに○○するなんて」といった見方が自然に出てきたりするの、男と女という区別のかたを知らず知らずのうちに身につけているからかもしれません。

ここで読解問題1を考えよう。

「ここで重要なのは、第二のタイプ、つまり、知らず知らずのうちに学校に入り込んでくる隠れたカリキュラムです」とあるが、「隠れたカリキュラム」に注目するのが重要なのはなぜか。

先に見た「あたりまえだと思っていることが、じつはあたりまえではないのに、あたりまえのまま疑われなくなる可能性がある」がまず理由として挙げられる。しかし、もう少し進もう。疑わないと何がまずい？ 例から取り出すと、

⑦段落。「他のやり方もあるのに」他のやり方はないか、と考えなくなる」

⑧段落。「あたりまえだと考えている前提が変化していることに気づかない」

★「なぜ」↓過程の説明。「第二のタイプの隠れたカリキュラム」が何をもたらすのか、順番に書いていく。

(解答例1)「第二のタイプの隠れたカリキュラムは、知らないうちに入り込むため、当然だと思っていることが、実は当然ではなく、他の考え方もあることに気づかなくなるから。(75字)」

しかし、⑨段落には、さらにその先についても書かれている。

「私たちは、自分たちのまわりの世界を、どのように区別するかを知らず知らずのうちに身につけていきます。男と女の違いをどう見るか。そして、そういう区別のしかたが、私たちの行動や考え方にも反映するようになります」

その当然と考える前提とは、世界を区別する仕方のこと。そして、男女の例を見ればわかるように、それはたんなる区別ではなく、ある価値観をとめない、ときには差別に通じるような区別であるということ。——知らないうちに偏見が根付き、差別している。だから、問題、なのだ。ここまで入れると、

(解答例2)「(第二のタイプの)隠れたカリキュラムは、知らないうちに心に入り込み、特定の世界の区別の仕方を当然だと思わせ、他の考え方もあることに気づけなくし、差別や偏見を生む場合もあるから。(86字)」

⑩ 2年齢という区別のしかたも同じです。年齢が一歳違うだけで、先輩と後輩の区別がつけられたりするの、学年という区別のしかたが学校の中でごく自然に行われていることと関係しています。そして、こういう年齢という区別を気にしながら、社会人になっても、会社の中でだれが先輩かとか、だれが同期だとかいったように、人との関係の取り方が違ってきたりするのは。

学校での学年の区別が、社会へ出てから先輩後輩を意識することにつながっている。逆にいうと、学年の区別が曖昧な環境で育ったなら、先輩後輩という意識は薄いということになる。

ここで読解問題2を考えよう。

2「年齢という区別のしかたも同じです」とあるが、何と、どのような点で同じなのか。

何と同じか。男女の区別と同じ。男女の区別が何をもたらすかについてまとめてあった箇所を利用しよう。⑨段落。

「このように、隠れたカリキュラムを通じて、私たちは、自分たちのまわりの世界を、どのように区別するかを知らず知らずのうちに身につけていきます。男と女の違いをどう見るか。そして、そういう区別のしかたが、私たちの行動や考え方にも反映するように

なります。」

材料はこれ。組み立て方を、きっちり決めよう。文の形を考える。★文の形は、設問が示してくれている。

「年齢という区別のしかたも、男女の区別と同じように、くする点。」

(解答例1)「年齢という区別のしかたも、男女の区別と同じように、隠れたカリキュラムを通じて、それを自分たちのまわりの世界の区別のしかたとして知らず知らずのうちに身につけ、その区別のしかたが、私たちの行動や考え方にも反映されるようになる点。(112字)」

ほとんど、本文をくっつけ直したのだが、傍点部分はいじってある。くっつけたのはいいが、なめらかさを欠く、へんなつながりになっていることに気づかない人がいる。この答案も、よく見ると、まだ直すべきところがある。それに、長い。どう推敲する？

(解答例2)「(私たちは)年齢の区別もまた、男女の区別と同じように、隠れたカリキュラムを通じて、知らず知らずのうちに身につけ、その区別の仕方を自分の考え方や行動に反映してしまふ点。(77字)」

(私たちは)という主語は省略できるが、主語を立てて構文を整える方がいい。隠れた主語を立てる(笑)。★常に主語を立てよ(実際には省略するにせよ)。解答例1は、前半後半で主語が変わっている。そういう手もあるが、一貫している方がふつうはすっきりする。

⑪ さらに、日本という国のまとまりや日本人と外国人といった区別のしかたにしても、そういう区別のしかたを、知らず知らずのうちに身につけていることが基礎にあるのです。自分日本人という意識をもとに、他の国のできごとや他の国の人とつきあっていくのか、それとも、そういう日本人という意識を離れて、自分個人としてつきあっていくのか。こういう違いも、日本というまとまりをどのように区別しているかに関係しています。そして、こういう「日本人としての自分」という意識のもとが、学校での隠れたカリキュラムなどを通じてつくられ、強化されていくのです。

これもまた、インターナショナルスクールのようなところで育った人と、君が代や日の丸を儀式的たびごとに見聞きしてきた人では、意識の違いがあるだろう。いや、国旗国歌は、正確には「隠れた」ではない。もつと日常の、ちよつとしたこと、地図が日本中心とか、学校のおたよりに元号が使われているとか、この評論文自体が「日本人」に向けて例を挙げていることとか——に意識はあらわれる。

⑫ このように疑ってみると、知らず知らずに入り込む隠れたカリキュラムは、それが前提としていたりあたりまえのことを、より強化しているといえます。ほかのやり方の可能性があることさえ、気づかないようにさせてしまう。たとえば、男女という区別を取り払ってみたり、年齢という区別を取り払ってみたり、どの国の人であるかという区別を取り払ってみたり、そうしたときに、私たちは、どのような新しい関係を築き上げることができるのか(こうしたことは、日本の社会でなぜ男女の平等がもつと進

まないのかとか、日本で生まれた外国籍の人が国や地方の議員になれないのはなぜか、といった問題にもつながっています。ところが、こういう想像がはたらかなくなるようにする力を、隠れたカリキュラムはもっているのです。

「隠れたカリキュラム」は、こう見ると、疑われることのない特定の価値観、ともいいかえられる。しかし、「カリキュラム」という言葉が使われているのは、それが〈学校〉の中で共有され、機能している価値観だから。学校というところは、ある価値観に方向づけしようとする磁場をもっている。先生は、これは○、これは×、と採点⇨価値づけするよね。先生が無意識に〈採点⇨価値づけ〉することで、子どもその価値観を、より強く学習していくことになる――。

⑬ 学校というところは、秩序を重んじる場所です。秩序というのは、まずは、自分たちのまわりの世界をどのように区別し、そうやって区別された人やモノやコトがらを、どのように関係づけるかによって成り立っています。ですから、区別のしかたを変えてみるだけで、自分と世界との関係も変わってくるのです。こういう秩序のでき方や、私たちの社会の組み立て方ということにも、隠れたカリキュラムは関係しています。ですから、隠れたカリキュラムを発見することは、このような、3 私たちと世界との関係のあり方が、知らず知らずのうちに、どのように維持されているのかに目を向けることになるのです。

読解問題3 「私たちと世界との関係のあり方」とはどのようなことか。★傍線部を延長すれば、「このような、私たちと世界との関係のあり方が、知らず知らずのうちに、どのように維持されているのか」となる。指示内容を明らかにする問い。ほとんど抜き出しで、(解答例)「自分たちのまわりの世界をどのように区別し、そうやって区別された人やモノやコトがらを、どのように関係づけるか、ということ。」
文末の「こと」を「秩序」としても可。

■読解問題

- 1 「ここで重要なのは、第二のタイプ、つまり、知らず知らずのうちに学校に入り込んでくる隠れたカリキュラムです」とあるが、「隠れたカリキュラム」に注目するのが重要なのはなぜか。
- 2 「年齢という区別のしかたも同じです」とあるが、何と、どのような点で同じなのか。
- 3 「私たちと世界との関係のあり方」とはどのようなことか。

■発展問題

- 1 本文全体の主旨をふまえて、「隠れたカリキュラム」に注目するのが重要なのはなぜか、という1番の問いについて、改めて答えなさい。

ポイントは、⑬段落の「区別のしかたを変えてみるだけで、自分と世界との関係も変わってくる」。「隠れたカリキュラム」は、無意識に特定のものの見方を刷り込むけれども、隠れたカリキュラムに意識的になり、それを発見することは、これまでのものの見方⇨関係づけに気づくチャンスになる。さらに、その無意識のものの見方が、自分たちを縛っていること⇨なんだか苦しい感じがすることの原因だった、ということにも気づくことになる。気づけば、区別の仕方を変えることもできる。なんだ、これでもよかつたんじゃない！さて、では、1番の解答に続ける形で、答えを作ってみよう。
「隠れたカリキュラムは、知らないうちに心に入り込み、特定の世界の区別の仕方を当然だと思わせ、他の考え方もあることに気づけなくし、差別や偏見を生む場合もある。しかし、その区別のしかたに気づくことは…」

※こういう「本文全体の主旨をふまえて」という設問は、大学入試に必ず出る。最後の設問はたいがいそうだ。結局、こういう問いは、全体の主旨、もつというところ、本文の中心の問いに対する答えをまとめる問題になっている。今回のだと、「隠れたカリキュラムに注目するのはなぜか」が中心の問いで、「もの見方を変えて、新たな関係を作るチャンスになるから」が答え。

- 2 学校の「隠れたカリキュラム」について、思い当たる事例を挙げなさい。小中高、いずれでもよいし、ある学校に特有の事例でもよい。いくつ挙げてもよい。

※(本文にはない)事例を想定する」というのは、たいへん重要なスキル。具体的な事例が乏しい、または、挙がっている例がピンと来ないときに、このスキルが使えるかどうかで理解の度合いが決まる。

考え方。「隠れたカリキュラム」という字をいくら見ても、思いつかない。「学校で、先生も生徒も、それが当然や、と思っている、区別の仕方(価値観)」の例、っていうふうに、条件を噛み砕いてから想起する。さらに「ほかの場所、例えば、外国の学校、塾、スポーツのスクール、大学のような、似てるけど、別種の場所を思い浮かべて、違いを見つめる。(キンコンカンコン♪ってどこでも鳴るんかな?)とか。教育社会学でいう「隠れたカリキュラム」からちよつとズレた例が出るかもしれないが、かまわない。

●重要語「秩序」⇨世界を区別し、関係づけることによって、ある安定した状態にあることをいう。学校では、人間を、先生⇨生徒、男⇨女、一年⇨二年⇨三年、一組⇨二組⇨というふうに区別し、上下をつけたり、番号をつけたりして関係づける。時間割も一つの区別と関係づけだし、一学期⇨二期⇨というの、時間的区別とその関係づけだ。このように、人間・空間・時間、至る所に区別⇨切れ目を入れ、名前をつけることによって、わたしたちは(安心して)世界を捉えている。この切れ目が失われた状態が混沌(渾沌・カオス・ケイオス)だ。▼全校集会で学年組男女ごとに、先生を先頭に整列して校長先生を見ている姿、これが(学校的な)秩序。同じ場所に、被災した近隣の人たちが、男女老若関係なく、クラスも学年も担任もなく、出たり入ったり、色んな姿勢で入り乱れて口々に声を出している図が(混沌)。